

【41】

氏 名（国籍）	きむ 金	ぎょん ひ 京 姫（韓 国）	
学 位 の 種 類	博 士（文 学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 3873 号		
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	上田秋成文学の研究－俳諧を中心に－		
主 査	筑波大学教授	博士（人文科学）	清 登 典 子
副 査	筑波大学教授		稲 垣 泰 一
副 査	筑波大学教授		犬 井 善 壽
副 査	筑波大学教授	文学博士	伊 藤 益

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、上田秋成の文学活動の中でもとくに俳諧活動に注目し、俳諧における交遊関係を明らかにすることで秋成の文学的環境を浮かび上がらせるとともに、秋成俳諧の特色につき考察を加え、紀行文や和歌、和文、読本などの秋成の他ジャンルの文学作品と俳諧との関わりを追求することで、秋成の文学活動の全体像を新しく提示しようとするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序論

- | | | |
|-----|-----|-------------|
| 第一部 | 第一章 | 秋成の生涯と文学活動 |
| | 第二章 | 秋成の交遊関係と俳諧 |
| 第二部 | 第三章 | 秋成の発句 |
| | 第四章 | 秋成における芭蕉の受容 |
| 第三部 | 第五章 | 紀行文と俳諧 |
| | 第六章 | 和歌・和文と俳諧 |
| | 第七章 | 読本と俳諧 |

結論

第一部では、秋成の文学活動において俳諧がどのような位置を占めていたのか、また俳諧における交遊関係の中心を占めていたのはどのような人々であったのかを明らかにする。第一章では、俳諧、和歌、散文（浮世草子・読本・随筆などを含む）、国学など多岐にわたる秋成の文学活動全般について年次順に整理し、秋成の文学活動が俳諧活動から始められ最晩年に至るまで継続して行われており、秋成文学の基盤となるものであることを確認する。第二章では、秋成の俳諧活動における交遊関係について調査、検討を加えることで、俳諧を中心とする秋成の文学的環境を浮かび上がらせる。

第二部では、秋成の俳諧作品そのものを取り上げて検討を加える。第三章では、現在知られる秋成の全発句に検討を加え、そこに見られる俳風上の特色が談林俳諧の流れを汲む中興都市俳諧の特色と共通のものであることを指摘する。第四章では、秋成の発句に見られる先行作品の受容について、特に芭蕉俳諧の受容

を中心に検討し、秋成発句における芭蕉受容句の特色を明らかにする。

第三部では、秋成の俳諧と他ジャンルの作品との関わりについて検討する。第五章では紀行文と俳諧との関わりについて、俳諧紀行文『去年の枝折』を取り上げ、従来は芭蕉批判の文章としてのみ取り上げられてきた箇所について、笑いの要素が多様に機能する俳諧性のある文章として捉え直すことができることを指摘する。第六章では、和歌、和文と俳諧との関わりについて同一の旅に基づいて作られた和歌紀行『秋山記』と俳諧紀行『去年の枝折』とを比較しつつ検討を加える。その結果、『秋山記』の和歌に滑稽性がある作品や俳言の用いられている作品が見られる一方で、『去年の枝折』の発句には全く俳言の含まれていない作品が見られることを指摘し、そうした創作のあり方の背後に和歌、俳諧というジャンル、形式の違いにこだわらず両者を心の表現として同じように楽しむ秋成の姿勢があったことを『也哉紗』『藤簍冊子』などの秋成の言説から浮かび上がらせる。第七章では、読本と俳諧との関わりについて、『雨月物語』第六話「吉備津の釜」を取り上げて検討する。まず、従来は主として正太郎の立場から読まれてきた「吉備津の釜」を、磯良の「恨み」を主題とする磯良の物語として読むべき事を主張した上で、登場人物名や舞台となる土地の名、さらに復讐が果たされる場所の設定などに「恨み」の語を核とした俳諧的連想語が用いられており、本話全体が俳諧的連想の手法によって展開していることを指摘する。特に俳諧的連想手法として、一つの語からの連想語をそのまま用いるのではなく、その連想語からさらに連想される語を用いるという談林俳諧の手法の一つである「ぬけ」の手法が用いられていることに注目する。さらにこのような俳諧的連想の手法が用いられている意味について、『雨月物語』の第一読者として秋成が想定していた当時の友人たちの多くが俳諧師または俳諧作者たちによって占められていた事実に起因するものであることを指摘する。

結論においては、以上の検討の結果として、秋成の俳諧活動を単なる余技としてきた従来の見方を退ける。俳諧、和歌、浮世草子、読本、国学など多方面にわたって活躍した江戸中期の文人である秋成文学の全体像を把握するためには、彼の文学活動の基盤であった俳諧を中心にそれぞれのジャンルの相互影響関係を検討、分析していく必要があると結論する。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、上田秋成の俳諧活動が彼の文学活動全般の基盤をなすものであったことを明確にした上で、俳諧交流を中心とした秋成の文学的環境を浮かび上がらせ、俳諧作品の特色を明らかにするとともに、紀行文、和歌、和文、読本などの秋成の他ジャンルの文学作品について俳諧との関わりという観点から検討を加えることで新しい解釈を提示したものである。

従来、秋成文学の研究は読本作品を中心に行われていたが、浮世草子、和歌、和文、国学、俳諧なども次第に研究対象とされ、各領域においての優れた研究業績が積み上げられてきている。しかし、それらの研究は各領域内の研究にとどまるものがほとんどであり、異なるジャンルの文学作品間の相互影響関係を究明し、多方面に活躍した文人秋成の文学活動の全体像を解明しようとする研究は十分に行われてきているとは言い難い状況である。こうした中であって、本論文は、秋成の俳諧活動に注目しながらも、俳諧作品のみを取り上げるのではなく、秋成の他ジャンルの文学作品について俳諧との関わりという観点から検討を加えることで新しい解釈を示した点に大きな特色があると言える。

まず、多くの先学によって明らかにされてきている秋成の多岐にわたる文学活動の全事項につき調査、確認した上で、いくつかの訂正・補足を行い、年次順に整理して提示した。その結果、秋成の文学活動が俳諧活動から始められ、一時的に不活発な時期はあったものの最晩年に至るまで続けられた秋成文学の基盤となるものであったことを明確にした。さらに、俳諧活動の中で交流を持った人々の俳系や交流の様相についても調査追求し、宝暦・明和期には大坂の都市系俳諧宗匠である紹廉門、淡々門の俳人たち、安永・天明・寛

政前期には京の夜半亭一門の俳人たちがその交流圏の中心を占めていたことを明らかにし、俳諧を中心とした秋成の文学的環境を浮かび上がらせることに成功している。

また、これまで文学作品としての本格的な研究がなされないままであった秋成の発句作品全二二三句を取り上げ、俳風上の特色について具体的に検討を加えた結果、その俳風が談林俳諧の流れを汲む中興期都市俳諧の特色を見せるものであること、また先行俳人の発句として芭蕉発句を最も多く受容しているもののその受容の仕方に当時広く見られた芭蕉崇拜の姿勢が見られないことを指摘したことは、秋成の俳諧研究の礎を築くものとして評価できる。

さらに、俳諧と他のジャンルの文学作品との関わりについて検討し、俳諧と紀行文との関わりに関しては、紀行文『去年の枝折』を取り上げて検討し、従来は芭蕉批判の文章としてのみ理解されてきた箇所について、機知、滑稽性に富んだ俳諧性を持つ文章として解釈できるという新しい読みを示した。また、俳諧と和歌、和文との関わりに関しては、『去年の枝折』の発句と『秋山記』の和歌との比較検討を通して、両者の詠まれ方に近似性が見られることを指摘し、その背景に『也哉鈔』『藤簞冊子』などの言説から窺える、ジャンルや形式の違いにこだわらない秋成の創作意識があったのではないかと推定した。俳諧と読本との関わりに関しては、『雨月物語』中の「吉備津の釜」を取り上げて検討し、「吉備津の釜」に見られる人名、地名に俳諧的連想語が用いられていること、物語の展開に俳諧的連想手法が生かされていることを指摘した。これらはどれも従来の研究には見られない新しい視点、解釈を提示したものであり、秋成文学研究の新しい視座を切り開くものとして高く評価できる。

このように、本論文は、新しい視点に立った秋成文学研究として高く評価できるものであるが、秋成の俳諧活動に焦点を当てるものでありながら、発句作品のみを取り上げ連句作品や点取り俳諧作品を取り上げていないなど、不十分な点も見られる。それらの分野に対する本格的な検討と、本論文では取り上げられなかった『春雨物語』などの読本作品や紀行文、和文、和歌作品などについての俳諧との関わりの追求とが、本論文の主張をさらに確たるものとするはずである。

とはいえ、本論文が、これまで余技としてしか捉えられてこなかった秋成の俳諧活動を秋成文学の基盤をなすものとして把握し直し、秋成俳諧の特色を明らかにするとともに、紀行文、和歌、和文、読本などの他ジャンルの作品について、俳諧との関わりの観点から見直すことで新しい解釈を提示したことは確かである。本論文は、上田秋成の俳諧作品に対する本格的な基礎研究としてだけでなく、秋成研究の新しい視座を切り開く研究として秋成文学研究および近世文学研究に大きな貢献をなすものと評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。